



# 少年と岐路

— Boy And Crossroads —

原作：カント  
AUTHOR KANTO

イラスト：水上 三十歳  
ILLUSTRATION mizukami hatati

©  
DrawingWriting



# 少年と岐路

— Boy And Crossroads —

© DrawingWriting

原作：カント イラスト：水上二十歳

# 少年と岐路

— Boy And Crossroads —

原作：カント  
AUTHOR KANTO

イラスト：水上二十歳  
ILLUSTRATION mizukami hatati



DrawingWriting

第一話 草原と炎

第二話 対立と協調

第三話 朝陽と夕陽

第四話 殺害と蘇生

第五話 襲撃と追跡

第六話 仮説と真実

第七話 過去と現在

第八話 人間と化け物

第九話 曇天と黒煙

第十話 進歩と停滞

第十一話 赤と虹

第十二話 神と世界

第十三話 終幕と開幕

## 第一話 「草原と炎」

彼は叫んだ。叫び、立ち上がり、真っ直ぐに正面の少年へと突っ込んだ。喉が潰れそうな程に大声を上げながら、眼前の少年を蹴り飛ばした。

少年が背にしていた大樹が砕け、木っ端が宙に舞う。少年は悲鳴も苦悶の声も漏らさず、じつとこちらを見つめていた。その視線を受けることすら苦痛で、彼は滅茶苦茶に手にした剣を振り回した。夜のように深い闇の森で、粉塵舞う最中で、幼い少年の体軀から鮮血が迸る。

少年が、右手をこちらに突き出した。無意識に横に跳んだ彼に少し遅れて、黄金色の光の束が少年の右手から放たれ、遠く後方で爆発音が響く。その爆音に負けぬ程の雄叫びを上げながら、彼はひたすら、自身に問いかけていた。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。どうして、こんなことに。どうして――。

風を斬る音の中、ふと脳裏をよぎったのは、「今日は空が高いな」という、意味も他愛もない考えだった。

浮かんだ思いを押し込めるように、彼は右足に深く体を預ける。草の海に自然と沈み込んだ彼の体、その頭上を、一拍遅れて、鈍色の軌跡が通り過ぎた。

少し乱暴に、右手を前に突き出す。それを受け、正面の相手は舌打ちと共に大きくのけぞった。結果、突き出した剣の切っ先は、相手の長い黒髪を数本貫いただけで、その向こうの青空へと進もうとする。

雲は無かった。快晴とは、こんな日のことを言うのだろう。

そう言えば。

次の斬撃をいなしながら、彼は思い出す。かつて、師が言っていた。大昔、世界が『大異変』と呼ばれる天災によって破滅する前。その頃の空は、場所によって、空の澄み具合が大きく違ったのだそうだ。

大きな街になればなるほど、空は濁り、天が遠ざかる。反対に、人が少ない山の奥では、空は澄み、天が近づく。だから、大異変前の多くの人々は、澄み渡る空を、星の瞬く夜を見られなかつ

たのだ、と。

そんな馬鹿な、と彼は思った。それじゃあ、まるで天が人間を嫌っているみたいじゃないか。

目の前の剣戟から離れていく心とは裏腹に、体は何の支障も無く、相手の剣をかわし続けた。時にはいなし、時には受けた。相手がかわし、いなし、受けられる程度の斬撃を放った。ドンドンと調子を合わせるような太鼓の重低音と宙を跳ね回るような笛の音が響き、吹き上げられた雑草が緑の匂いを放つ中、遠くからは時折、どよめきと歓声が響いてくる。

奏でられるメロディが、徐々に加速し始めた。

空の高さは、変わらない。昨日より、いつもより、少しだけ高い。彼を嫌い、遠ざかってしまつたかのように。

鋭く声を発して、相手は剣を高く振り上げた。そのまま姿勢を崩さず、微塵も切っ先を揺らさず、相手は剣を逆手に持ち変える。

押し込むような刺突がくる。

彼は、ああ、本当に空が高いな、と思った。

大地を軽く蹴り、やってきた突き、その刃の表面に片手を置いた。草の匂いと高い笛の音が遠くに霞み、歪められた突きを、前のめりの相手を飛び越えて、彼はふわりと大地に降り立つ。

同時に、右腕を振るう。

相手もまた、大きく剣を振るった。

宙で交叉する二振りに火花が散り、冬の大気を貫くように、衝突の音色が甲高く響き渡る。最中、彼は爪先を立て、右腕からの衝撃に身を預けた。そのまま勢いに任せ、くると回る。踊るように、捻り切られた足元の雑草が、風に泳いで飛んでいく。

左手を剣に添えたところで、相手と目が合った。

真つ直ぐな、黒い瞳だ。その視線に微かに頷いて、彼は荒々しく大地を踏んだ。秒にも満たぬ刻の後。

彼の剣、その切っ先は、相手の喉元のすぐ傍で、彫像のように静止していた。

「そこまでー」

張り詰めた大気を吹き飛ばすように、厳めしい声が草原を走った。意識から遠ざかっていた宙と太鼓と歓声が蘇り、彼は静かに、刃を引く。

同時に、相手も——彼女もまた、彼の喉元に向けていた剣を、そつと下ろした。そして、息をつき、小さく笑う。お疲れ様、とでも言うように。

「いやはや、全く見事な武踊であつた！」

先程の厳めしい声がまた響き、彼らは同時に、声の主へ向き直った。風の吹く草原、森の中にぽつかりと開いた広い原っぱ。そこで舞を繰り広げた彼らへ、数メートル先、草の海の上に特設された、

数十センチ程の高さの真つ白な壇上から、二人の男と一人の少女、そしてその後ろに控える複数の男女が拍手を送っている。

「カサムの民、戦士ナチー」

鋭い返事をして、傍らの女性が跪く。

「ジール王国警務隊、イワト！」

彼もまた声に応え、跪いた。

「互いの国一番、部族一番の剣の使い手同士による闘いが、此度も武踊となつておること、今更ながら幸せに思う。いやはや、それにしても真、真に素晴らしい武踊であつた！」

男はそう言つて、自身の居る壇上に設えられた、専用の玉座から立ち上がったまま、力強く拍手を続ける。四角に近い輪郭、豊かな口髭、そして風を受けて浮かび上がったような無造作な黒い髪は、獅子のそれを彷彿とさせる。

「トツカ王、貴殿の国には真、素晴らしい剣の使い手が居られる！一騎当千の二つ名にも納得と言えよう！」

筋肉で盛り上がった胸板の底から、肩幅の広いその体躯にびったりな低い声で男が言うど、トツカと呼ばれた男——筋骨隆々の男の隣、同じく特別に設えられた玉座に座り、穏やかな笑みを拍手と共にこちらに向けていた男——は、いやいや、と笑った。

「ミスマ王、貴公のご息女も、イワトに負けず劣らずの使い手だ。タケハ、お前もそう思うだろう？」  
 トツカは柔らかに、穏やかに、自身の傍ら、一段低い玉座に座る、十七、八の少女に尋ねた。が、長く豊かな金色の髪を風に遊ばせる彼女は、まだどこかあどけなさの残る顔を紅潮させながら、ひたすら拍手を続けている。肘掛けに止まったペットのシマフクロウが小さく鳴いたが、それも聞かえない様子だ。

タケハ、と、トツカが再度、名を呼んだ。それでようやく気がついたのか、彼女はハツとしてトツカに向き直り、何度も何度も頷いた。

「はい、お父様！ あの、とても、とっても！ 素晴らしい武踊でした！」

「うむ。私の話は？」

「ごめんなきい！」

「素直なことだ」

溜め息混じりに呟くトツカの姿に、隣のナチの肩が小刻みに震えた。笑いを堪えているらしい。壇上、二人の王の後ろに立つ大臣や、その警護の者も、数名ながら苦笑している。

「ミスマ王、娘の非礼をお詫び申し上げます」

トツカが告げると、ミスマはただ、大きく笑った。言葉にせずとも、「気にするな」というミスマの意図が伝わってくる。

「さて。それでは、ミスマ王」

「うむ。皆の者、改めて、流麗剣舞な武踊の舞手、イワトとナチに！」

「最大にして盛大な賞賛を！」

二人の王に呼応して、背後から一際大きな拍手が巻き起こった。立ち上がり、ナチと共に振り向くと、そこでは彼らを囲うように、数百人の戦士達が、惜しみ無い拍手を送っている。

遠くの男たち（少数ながら女性も居たが）に一礼し、それから振り返って、再度、王達に頭を下げる。そして、ナチと歩調を合わせながら、拍手の大渦の中、ゆつくりと歩いていく。王達の壇を、コの字を描くように迂回し、壁のような衝立の後ろ、控室とでも呼ぶべき場へ。

「イワト様！」

退き行く彼に、興奮した調子の高い声が届く。体を向けると、立ち上がり、未だパチパチと拍手をするタケハが、「本当に素敵でした！」と強く言った。

声を出すべきか迷って、結局、彼は彼女に深くお辞儀をする。

どうやら、一つ目の儀式は無事、終了したようだった。

『受威の儀』と呼ばれるこの儀式は、大きく分けて三つの段階に別れている。

まず、『カサムの民』と『ジール王国』、それぞれのコミュニティから一人ずつ選ばれた戦士同士による『武踊』。つまり真剣勝負だ。二人の王と両配下の戦士たちの前で行うこの剣戟は、それぞれで一番の剣の使い手によるものであり、儀式一番の見せ場でもある。

二つ目に、両コミュニティの戦士たちによる合同演習。これも王達の御前で行われ、所属コミュニティの垣根を越えた複数のグループによる疑似戦闘が、昼一番の武踊完了後、夕陽が射す頃まで続けられる。

そして、最後に。

「——そう言えばイワト。今日の武踊中、何か考え事をしていましたでしょう」

丁度、慣れない手つきでスープを口に運ぼうとしていたところに降ってきたナチの指摘は、彼の動揺を誘うに十分だった。思わず「え」と漏らしたのと同時に、スプーンから温かいコーンスープが零れ落ちていく。

「ほう？ それは真か、イワト？」

ニヤニヤと笑いながら、ミスマが問い掛けてくる。どうやら、親子共々気付いていたらしい。

流石は武人の家系、などと暢気なことを思いながら、彼は首を横に振った。

「いや、そんな。まさか、こんな大事な儀式の最中に、考え事なんて」

「でもイワト様、いまま少し動揺されていたような……」

怪訝そうなタケハの声で、カサムの民二名は可笑しそうに笑った。一方、タケハの隣ではトツカが苦笑いしている。

「全く、タケハといいイワトといい……申し訳ない、ミスマ王。どうも我が国は、皆して抜けているようで困る」

「いやいやトツカ殿、こちらは一向に構わぬさ。むしろ、考え事をしながらあれだけの舞が為せるなど、カサムに婿入りして欲しいくらいだ」

ハッハッハ、と、トツカはいつも通りの豪快な調子で笑う。場の皆に謝りながら、若干の恨めしさを込めてナチを見るイワトだが、当の彼女は慣れた手つきで——いつも着ている真っ黒でびっちりとしたスボンと白いシャツの上に、フォーマルな場に合わせてか、襟元に装飾の施された真つ赤なボレロを着用している——食卓から野菜サラダを口に運んでいて、こちらには見向きもしない。……どうやら、『考え事をしながら』の武踊に、少し腹を立てていたらしい。

それもそうか、とイワトは独り納得する。彼女からすれば、あれは全力の剣戟だった筈だ。その一方で、相手に手を抜かれていたとあっては、憤りの一つや二つ、感じることもだろう。

「しかしイウト、この後は流石にあまり呆けてくれるなよ？ でないと、私が殺されてしまうやも知れぬ」

また笑うミスマに、イウトは苦笑いしながら、勿論 と返す。タケハは金色の髪を揺らし、くすくすと笑っていた。彼女はまだ、成人もしていない少女だ。最後の儀式を控えた会食でのこの暴露は、外交上少々痛い話題の筈のだが、まだそこに本腰で携わっていない王女には、只の間の抜けた話に終わるのだろう。

だが、トツカ王は話が別だ。イウトは会食後、ひいては儀式完了後の大目玉を覚悟した。下手をすると降格も有り得る。

「——おっと、もうこのような時間か」

ふと、トツカが呟いた。場の皆が一斉に、部屋の入口付近に設えられた大きな柱時計を見ると、時刻は二十時を過ぎてている。部屋の中央にて燃え盛る暖炉の炎で感じなかったが、外はもう、随分と冷え込んでいることだろう。

「おお、真だ。いやいや、楽しい食事の場に、つい時間を忘れてしまっていた」

立ち上がり、次の予定について話している王達を見ながら、イウトは儀式のタイムテーブルを頭に思い浮かべた。確か、最後の儀式は日付が変わってから執り行われる筈だ。そしてそれに備え、この会食の後、二人の王は政治的な会談を行うことになっている。

「では、準備が整い次第」

「うむ。タケハ王女、今日は一日ご苦労様でしたな。後は父上に任せ、ゆっくりお休み下され」

「ありがとうございます、ミスマのおじさま。儀式の成功をお祈りしております」

立ち上がり、タケハは深々とお辞儀をする。真っ白なワンピースのドレスがよく似合っていて、その所作には、紛れもない王族としての気品があった。

「……あの、トツカ王。武踊の件、大変失礼致しました」

ミスマとナチが会食の部屋より退出してから、イウトはすぐ、王に深々と頭を下げた。タケハの不安げな視線の中、返ってきたのは、「うん、ああ」という気のない返事だった。

「何も問題は無い。ミスマ王も笑い飛ばしていたし、舞は十二分に美しかったからな」

「そうです、イウト様！ とつても素敵でした！」

王女は目をキラキラと輝かせ、熱のこもった口調で告げる。儀式に初参加だったことも手伝わてか、彼女にはこれ以上無い刺激になったようだ。……だが。

改めて頭を下げ、再度、王と王女に謝罪と感謝を告げる。そうしてから、王をじっと見つめた。すらりとした細身の体躯に、金色の王紋が胸に描かれた白のチュニック、同じ色のズボン。眉間に深い皺を寄せながら、整えられた口髭を手でなぞる王は、ただ静かに、食卓の上に鋭い眼光を投げかけている。

「タケハ」

「はい？」

「お前ももう十八だ。それに、少なからず国政にも関わっている。自分が担う責務や使命を受け入れていると、私は信じている」

脈絡の無い言葉に、タケハはきよんとして父親を見つめている。だが、その疑問に答えることもなく、王は歩き出した。

「私に何かあったら、その時は頼むぞ」

お父様、と不安そうにタケハは言った。トツカは小さく笑って、そのまま部屋を出ていく。王女は答えを求めるかのようにイウトに視線を投げ掛けるが、本意を彼が返せる筈も無い。

「少しお疲れでいらつしやるのですよ、きつと。それに、もうすぐ儀式の中核です。少々気が立つておられるのでは」

我ながら中身の無い励ましだな、と思う。だが、それでも彼女には効果があつたらしい。はい、と強く応えて、彼女もまた、父に続いた。

儀式専用のこのレンガ造りのヴィラには、幾つかの部屋が用意されている。会食用の部屋、会談用の部屋、その他控室や警務隊の待機部屋、衣装部屋などなど。一つ一つの部屋も広く、優に大の大人が十数人居ても寛げる程だ。しかし、現在は四年に一度の儀式中で、かつ王族が滞在し

ていることもあり、部屋の出入口はおろか、控室に向かう通廊にさえ、数メートル間隔で警備の者が仁王立ちしている。若干の息苦しさを覚えるのは、イウトだけでは無いだろう。

「あの、イウト様。私の、お城までの警護って」

「生憎、私では。……警務隊の者が十数名付き従いますし、最近では周辺部族とのいざこざも殆どありません。心配は無用ですよ」

振り返って不安げな表情を見せる王女に、イウトは穏やかに微笑んだ。が、チクリと、刺すような視線を感じて、彼は通廊の先、近付いてきた大臣と話している王の、その隣へと視線を向ける。

真つ黒でタイトなズボンに真つ白なシャツ、胸に楓の紋章がプリントされた藍色の上衣。イウトと同じ服装の、イウトよりも少しだけ背の高い男が、王に付き添いながらこちらを睨んでいる。目の下の隈は深く、頬はこけ、しかし眼光は刃のように鋭い。その出で立ちは、殺気だった蠅螂を彷彿とさせる。

「——待たせたな。それでは会談に向かおう、カズイ。警護は頼むぞ」

「仰せの通りに」

カズイ、と呼ばれたその男はフン、と鼻を鳴らし、イウトを一睨みして、王と共に通廊の奥へと消えた。威圧感が消え失せて、イウトは思わず息をつく。

「どっかなされたのですか？」

ふと声を掛けられて眼前に目を移すと、いつの間に控室から連れてきたのか、タケハはその腕にペット——大きなブラウンのシマフクロウを抱いていた。主の挙動を真似るかのように、フクロウは首を傾げ、こちらを見上げています。

「イワト様もお疲れなのですね」

「タケハ様に比べれば、まだまだですよ。さ、帰りましょう。馬車まで見送ります」

王とは逆方向に進み、玄関口を出ると、王族の出で立ちと同じ、真っ白で優麗な馬車がすぐに待機していた。乗り込むタケハの代わりにペットのフクロウを持ってやって、彼女が車内に座ってから、その体長七十センチ程の大きなペットを手渡す。

「イワト様。お父様をお願いします」

車内で、不意に王女が言った。

「何だか私、段々胸騒ぎがして参りました。とても恐ろしいことが起こるのでは、って」

「大丈夫ですよ。警護は大勢居ますし、儀式の間は私もナチも居ます。何も心配はありません」

そう言っていると、タケハは柔らかに微笑む。お休みなさい、と交わす彼らの間で、フクロウはまだ、不思議そうにこちらを見上げていた。

「お疲れ様」

前面、側面、後部まで警務隊員に警護されて進んでいく馬車を見送っていると、背後からポン

と肩を叩かれた。見ると、ナチが悪戯っぽく笑いながら、すぐ後ろに立っている。

「子守は大変ね」

「『王族の警護』だよ」

制服についた茶色い羽を払いつつ苦笑するイワトに、ナチは気の無い様子で伸びなどしている。

まだ武踊の件で怒ってるのか、と尋ねると、まさか、と逆に彼女は笑った。

「貴方との力量差くらい、もうずっと前から百も承知よ」

「じゃあ何で会食の時に」

「だって貴方、全然話さないんだもの。ダメよ、ああいう場では無理にでも会話を続けないと」

彼女の言葉は正論だった。耳が痛い、と苦笑しつつ、しかしイワトは胸中で呟く。それにしても、もっと別の話題は無かったものか。許して貰えたから良かったものの。

「で、貴方。儀式までのご予定は？」

ナチはヴィラの両開きの玄関口、その近くにて轟々と燃え盛る篝火に近付いていく。無理も無い。雪こそ降っていないものの、真冬の森は酷く冷え込む。イワトも急に寒さを思い出して、彼女と同じく、天へ向けて灰を噴き上げている篝火へと歩を進めた。

「予定って言われても、ここで仮眠を取るくらいしか」

「居心地悪くない？ 貴方、警務隊と仲良くないでしょ」

「は……ハッキリ言うなあ」

齒に衣着せぬ物言いにたじろぐが、「だつてそうでしょう？」とナチは悪びれない様子だ。玄関口にも警務隊員が二名、仁王立ちしているのだが、それすら気にしていない。彼女らしいと言えれば彼女らしい。

そして、彼女の言葉は、やはり真実だった。

「どうせなら、一緒に村へ行きましようよ。ここからそう遠くないし、貴方も気楽でしょう？」

これも正しい。イワトはじつと篝火を向いたままの、ナチの横顔を見つめた。

オレンジ色の炎に照らされながら、長い黒髪が風にはためいている。瞳には灯りが映り込んでいて、その表情は読み取れない。

「今の会話のカサム側警護担当って、誰だったかな」

「弟」

「ああ、イカツか。なら、僕らがここに居なくても安心だな」

まだまだよ、と言つてナチは笑つた。が、満更でも無さそうだ。

「じゃあ、お言葉に甘えようか」

背筋を這い上がる冷気に対し、篝火に手をかざす。イワトがジールの警務隊員となつて十年程だが、同じ警務隊員達よりも、カサムの民と共に戦つたことの方が多い。大事な儀式の最後を控

えたこの場面だ。少しくらい我が儘になつて、気楽に過ごせる場所を選択しても良いかも知れない。

ただ、皆、宴会と騒ぎが大好きな連中だ。仮眠は諦めた方が賢明だな、とイワトは小さく呟いた。

「よくぞ存知ね。さ、行きましよう」

篝火から離れ、ナチが歩き出す。目指すは、ここから東。ヴィラの側面から森の中に延びる、

小さな川を越えた先の、カサムの民の村だ。

「それにしても寒いわね。こんな時、カサムも馬車を用意すればいいのに、つて思うわ」

「あるじゃないか、馬に曳かせて移動出来るもの」

「戦車と馬車は違うでしょ、もう。あたしも一度くらい、馬車で送り迎えされてみたいわ」

真ん丸い月の光の下を、森の中を突つ切るように延びる幅の広い道を、首をすぼめるようにしながら進んでいく。隣を歩くナチの背は、丁度イワトと同じくらいで、イワトには何故かそれが、妙に心地良かった。

「馬車だつて寒いのは一緒だよ。おまけに、かなり揺れるし」

「あら、大人なご意見。けど、ジールのお姫様は馬車で、カサムのお姫様は徒歩、つていうこの構図は変わらないわ。おまけに、後者は王の護衛役まで担当よ」

ナチは嘆息をつく。カサムの王、ミスマ。ジールの国王、トツカ。ナチもタケハも、それら両

コミュニティを率いる者の血族だが、考えてみれば確かに、その待遇は大きく異なる。大きな表情の変化が無い彼女だから分かりづらいが、こう見えて『お姫様』に憧れているのかも知れない。「向こうのお姫様も、何だかんだ大変みたいだけどな」

会食後の、王の言葉を思い出す。責務や使命、とトツカは言った。一国を左右する立場になること——それはどれだけの重圧だろう。

「あら、お優しいのね、イワト様」

「やめてくれよ、その言い方」

からかうように言うナチに苦笑いしながら、イワトの脳裏にはふと、先程のタケハの言葉が蘇った。『段々胸騒ぎがして』という、不安げな王女の声。

「……まさか、ね」

「何？」

「いや。何でもないよ」

心に差し込んだ漠然とした不安に蓋をして、イワトはそう、ナチに微笑んだ。

遙か向こうに淡く浮かんでいた、小さく輝く二つの炎。その輪郭と、それを抱く二本の篝火の全容が見えてきた頃、一本道は大きく開けた。

昼間の武踊を行った場所よりも、更に広い原っぱ。目印に歩いてきた一際大きな篝火の向こうに、それと同じサイズの篝火が、まるで道を作るかのように、草原に規則正しく配置されているのが見える。空を往く鳥達からは、丁度闇に浮かぶ杯のように見えることだろう。

そして、実は一キロ平方メートル近いこの地が、最後の儀式の舞台となる。

篝火の数メートル手前で、イワトは静かに足を止めた。隣のナチも、ほぼ同時に。それに連なるようにして、背後の足音と馬車の音が、一つずつ、冷えた夜の大きに吸い込まれていく。

すべてが消えると、代わりに静寂が現れた。

ナチと同時に、振り返る。すぐ後ろには真っ白なチュニックと縦に長い帽子を被った神官が二名、その後ろには一人用の小さな馬車が二つ、どちらも並んで、月明かりを浴びている。更にその後ろには、会談中に王達を護衛していた二名、カズイとイクツが居る筈だ。

神官がこちらを向いたまま、二人同時に儀礼的な言葉を放つ。すると、少し間を置いて、ガタガタと二つの馬車が揺れた。

扉が開き、それぞれから人影が降り立つ。神官と同じ恰好で、同じような白い四角錐状の帽子で、表情は殆ど見えない。だが、正面からイワトに向かって歩いてくる男の、特徴的なまでに大きな肩幅と胸板は、それがミスマであることを如実に示している。

ミスマがすぐ隣に立った。同時に、ナチの隣にはトツカが。こうして、横に四人整列してから、二人の神官が何やら呪文のような、祈りのような声を上げ始める。

形式的な祈りの最中、イワトは横目で、隣のナチを見た。……疲れや、緊張の様相は微塵も無い。じつと立つその姿は、あたかも置物のようですらある。

結局、彼も彼女も、仮眠を取ることは叶わなかった。カサムの村に着くと、案の定、皆は宴会をしていて、イワトとナチはその中心に祭り上げられたのだ。

それから、たらふく野性的で豪快な馳走を振る舞われ、あれよあれよという間に儀式の始まりだ。若干の疲労を覚え始めている彼にとつて、ナチのポーカーフェイスは羨ましいの一言に尽きる。

「——では、儀式の成功を祈って」

二人の神官が跪き、イワトは注意を思考の澱から掬い上げた。回れ右をして、静かに、正面の篝火へと歩き出す。

やがて辿り着いた地点からは、次の篝火が見える。今度は、左右に別れるように、こうして、

篝火の道筋は、最終的に別々の小屋へと辿り着く筈だ。

「では、トツカ王」

イワトの後ろで、ミスマが口を開いた。

「明日の朝、陽を浴びながら、共にまた道を歩むことを願って」

事前の打ち合わせには無かった言葉だが、ミスマらしいと言えばミスマらしい。トツカは静かに頷いた。ナチを見ると、彼女もまた、小さく頷く。

再び、歩を進める。イワトは前方、左の篝火へ向かって。ナチは、右の炎へ向かって。四人は二つに別れ、やがて、ナチとトツカのペアは、闇に紛れて見えなくなった。

「うおっ、寒い！ 寒いなあ、イワト」

強い風が草原を走り抜けて、背後からミスマが悲鳴を上げた。イワトは溜め息をついて、ミスマ王、とついに口を開く。

「この最後の儀式は、静粛に厳粛に、というのがルールだったのでは？」

「固いことを言うな、イワト。ルールなぞ、目的を果たさんが為の手段にしか過ぎん」

そう言うと、ミスマはイワトに並んで歩き始めた。これで『護衛が先導する』という二つ目のルールまで、容易く破られたことになる。

「ミスマ王」

「まあそう固くなるな、イワト。いつも通り、気軽に『ミスマさん』と呼ぶがいい。何なら『お義父さん』でもいいぞ」

仕舞いには大きな笑い声を上げるミスマに、イワトは説得を諦めた。通り過ぎた篝火に照らされるミスマの表情は朗らかで——いつの間にか帽子すら外している——しかし、緊張が解けていく自分も居る。

「なあイワト、次の篝火でちよつと温もつていかぬか？」

「小屋に着けば幾らでも寛げますよ。もう少しの辛抱です」

「うむ、一理あるな。『小屋に着けば』」

ミスマはそう言ってニヤリと笑った。嫌な予感が出て尋ねてみるも、相手は鼻唄を返すばかりだ。

「いやあ、しかし今年も疲れた！ 四年に一度とは言え、やはり受威は肩が凝つていかん」

「まだ終わってませんが」

「例年ならばそうだが、今年は護衛がお主だからな。気兼ねも遠慮もせずに済む。前回はホレ、あのカマキリみたいな目のデカい」

「カズイですか？」

「そう、アヤツだ。話し掛けても仏頂面なばかりで、何も面白く無い」

「そりゃあそうですよ……」

受威の儀、最後の儀式。ここではジールとカサムの王が二手に別れ、一晚をこの草原で過ごすことになっている。互いの王を護衛するのは、昼間の武踊の舞手二人のみ。そして最大の特徴は、カサムの戦士がジールの王を、ジールの戦士がカサムの王を護衛するという点にある。つまり、互いの王は自らの命を、相手のコミュニティに預ける訳だ。

「下手に油断しているところを誰かに襲われて、それで王にもしものことがあつたら」

「この周囲一帯の森中にジールとカサムの戦士が居るのにか？ そうそうそんなことは起こらぬよ」

ミスマの意見は正しい。直近の護衛が一人ずつとはいええ、こんなところまで曲者がやってくることは無いだろう。とはいえ、万が一ということもある。

「とにかく、大人しくしててください。もう少しで小屋ですから」

「イワト」

「何ですか？」

「やっぱりちよつと篝火で温まっていかんか？」

「置いていきますよ」

ふつふつと燃えるミスマをなだめすかしながら、篝火を幾つも通り過ぎる。冬の、真夜中の大気は谷

敵なく肌を刺し、ミスマと同じく炎の誘惑に負けそうになるが、しかしその戦いも長くは続かなかった。

「おお、着いた着いた。これでゆっくり出来る」

篝火の終着点には、煉瓦造りの小さな小屋が、闇の中どっしりと佇んでいた。吹き抜ける風から逃げるように中へ入ろうとするミスマを制し、イワトは木製のドアをゆっくりと開く。

中は幅が四メートル程、奥行きがその倍程の、直方体の空間になっている。部屋の最奥には炎の灯った立派な暖炉が設えられており、また壁には淡く輝く松明が幾つか掛かっかけていて、中は非常に温かい。王を迎える準備は万端のようだ。

当然ながら誰も居ないその部屋には、寝転がると右側から暖炉の熱を受けるような形で、大きなベッドが置かれている。真っ白なシーツと枕は一見簡素に見えるが、恐らくイワトの住居のそれとは比べ物にならない値段の代物だろう。そしてベッドの直上、数メートルの高さの天井には、採光用の天窗が一つ。そこから射す月光は、最後の儀式に相応しい美しさを、部屋の中に投げかけていた。

入ってよいか、と寒さに震えるミスマだが、無視して部屋の中に入った。入口からは死角となっているベッドの向こう側を覗き込み、念のためベッドの下もシーツをめくって確かめた。……曲者の姿は影も形も無い。

「お待ちせしました。中へどうぞ、ミスマさん」

礼を言いながらそそくさと室内に入り、真っ直ぐに暖炉へ向かうミスマに笑ってしまいがち、ナチも今、こんなやり取りをしているのかな、とふと思った。と言つても、向こうの相手は厳粛なトツカ王だ。こちらのように、平然と会話などしていないだろうが……。

「ではミスマさん、僕は外に居ますので、何かあれば——」

「まあ待って待ってイワト、お主も少しくらい火に当たっていいけ」

「お気遣いは嬉しいですが、一応外にも篝火が……あっ！」

視界に入ったものに、イワトは思わず声を上げる。どこから取り出したのか、ミスマはいつの間にか、自身の周囲に数本の酒瓶と干し肉、果実などを広げていた。挙句の果てには「まあまず一杯」などと言って、口の空いた酒瓶をこちらに向けてくる始末だ。

「い、一体どこからこんな」

静粛で厳粛、という儀式的イメージが足元から崩壊していく。ミスマは平然とベッドを指差した。見ると、シーツの下、ベッドの側面、丁度枕の下辺りに、ぽっかりと真っ暗な穴が開いている。近付いてよく見ると、どうも隠し扉らしかった。中は広く、まだ奥に酒瓶が鎮座している。

イワトはようやく、道中にミスマが見せた笑みの意味を知った。このオッサンは、最初から一晩呑み明かすつもりだったのだ！

「冗談にも程がありますよ、ミスマさん！　こんな……こんな大事な儀式で——」

「言っただろう、イワト」

止める間もなく、ミスマは酒瓶に口をつける。大きく出た喉仏がぐりぐりと動き、やがて彼は上機嫌な声を上げた。

「旨い！　なかなかいい具合に冷えて……まあそう睨むな。先程言った通り、ルールなど形に過ぎぬ。その意図や役割、目的を果たせるのなら、そこに拘る必要など」

「酒が呑みたいからって適当なこと言ってますん？」

「分かるか？　……いや、違う違う！　言い訳ではない、真面目な話だ」

豚くらいなら刺し殺せそうな視線を向けてやると、王は焦った様子で弁明した。そして、自身の隣に座るよう、身振りで示す。……イワトは溜め息をついて入口に戻り、念の為に鍵を閉めてから、ミスマの隣に座った。

「お主、この儀式の起源を？」

パチパチと音を立てて燃える暖炉の炎を見つめながら、ミスマはそう尋ねた。ええ、と返しなから、何だかもうどうでも良くなって、イワトは干し肉をかじる。腹は満足過ぎる程に膨れているが、こうでもしないと損な気がした。

「ジール建国時に作られた儀式なんでしょう？　『ジールとカサムの友好のため』」

「それもある。だが、受威の儀は元々、ジールとカサムを繋ぐ鎖……より深い目的が為に出来たのだ」

「ミスマがまた、ぐいと酒瓶を煽る。それを横目で見ながら、イワトは思い返していた。子供の頃に教わった、この国、ジールという国の始まりを。」

かつて、この世界の殆どを破壊に追いやった災厄、大異変。それはそれ以前の世界の姿を、原形すら留めない程に崩壊させた。しかし、そんな中、全くと言っていい程、被害を受けなかった地域があった。

幸運か、運命か。そこに住んでいた人々は、大異変前の世界の技術、知識、食料をそのまま受け継ぎ、余りにも恵まれた条件で、新世界での生活を始める。しかし、歴史の必然と言うべきだろうか。食料も水も豊富に兼ね備えていたその地域は、それを持たざる者たちからの襲撃を受けることとなる。撃退を繰り返す人々は、環境の変化に応じる為、やがて自らのコミュニティを、指導者であった女性をクイーンとする王国・ジールと呼び、組織的・体系的な規律・制度を整えていく。

「カサムは、ジール建国の際に独立した戦闘集団だ。ジールを外敵から守る剣となり、盾となる為」

ばきん、と、暖炉の中で薪が砕けた。炎に近付いたイワトは、新しい薪を輝きの中へと放り投

げて、火掻き棒で整える。

「何故、カサムはわざわざ独立したのだと思う？」

「え？」

「普通ならば、国内に専用の機関を作る筈だろう。大異変以前の世界で言うところの『軍隊』だな」

「警務隊が出来たのも、確かそれと同時期だったと記憶していますが」

「そうだ。だが、当時の人々は、全ての戦闘力をそこに集約させなかった。国内の治安維持を主とする『警務隊』と、対外戦闘を主とする『カサム』とに——特に後者に比重を置いて——戦力を分散させた。その理由を？」

イウトは首を横に振り、再度、ミスマの隣に座る。遠くで鳥が羽ばたく音がした。天窓へ目を向けると、月が冷たくこちらを見下ろしている。

「カサムの任務はな、イウト。専守防衛が第一なのだ。あくまでも略奪や侵略からジールを守る。それがその興りであり、時代によって、ジールによって、その剣を攻撃に利用されてはならない。……そのように、ジールの初代女王は定めた」

そこでふと、ミスマは笑った。何故か、懐かしそうに。

「彼女は聡明だったのだよ、イウト。聡明で、争いを嫌った。だから、時代を重ね、カサムとジールの関係が形骸化し、この形が崩れぬよう備えた。カサムが暴走せぬよう、ジールとカサムが一

体にならぬよう」

そこでまて言うと、ミスマは傍にあった透明な瓶を一つ掴み、イウトに手渡そうとする。幾ら何でも酒はマズい、と断るより前に、彼は「水だ」と告げた。

受け取り、瓶の口から匂いを確かめる。……嘘ではないらしい。

「ちよつと待て、そんなに信用ならんか？」

「あ、すいません。ただ、何と言うか……日頃の行いっていうか」

言つてから、全くフオローにならないことに気付いた。しかし、ミスマとも付き合いは長く、彼が水と言いながら酒を手渡してきたのは一度や二度ではない。

「全く……まあそれはいい。とにかく、受威の興りと目的は分かっただろう。ジールとカサムを繋ぎ、互いのコミュニティにとつて互いが必要であること。両者は二つで二つであること、しかし一つになつてはならぬこと。その再認識が儀式の本分であり、全てだ。……だから本来ならば、こうして酒を酌み交わすだけで十分なのだよ」

ふう、と息を一つ吐いて、ミスマは天井を——天窓から覗く夜を見上げた。そこでようやく、イウトは気付いた。ミスマの顔一杯に、疲労が広がっていることに。

「人間とは、生命とは厄介なものだなあ、イウト。やれ儀式だ、やれ演習だと、そんなものを残さねば、想いは次代に繋がらぬ。大勢をまとめることも出来ぬ。誠に因果で、厄介なものよ。」

だが、例えどれ程厄介であろうと——」

そこまで言うと、ミスマはまた、ぐい、と酒瓶をあおった。味わうようにゆつくり飲み込み、それから一つ、大きく息を吐く。

「——まあ、何だ。つまり、言いたいのは、だな」

「目的は果たせてるんだから、酒くらい許せ、ってことですか」

何だか気が緩んで、渡された瓶に口をつける。喉を通る冷たい感触は、成る程、確かにミスマの告げた通り、只の水だ。

そして、思い直した。儀式だろうが何だろうが、晩酌を付き合うくらい、許されてもいいのでは。それもある。が、イウト。お主、一体いつになったらナチと婚約するのだ？」

もっと飲み込もうとしたところでの予想外の質問に、イウトは大きくむせた。胸をドンドンと叩く彼に、ミスマは飄々と次の矢を放つ。

「わしがお主くらいの歳には、もう妻をめぐっておったぞ。子供すら——」

「ちよっと。ちよっと待って」

ようやく声が出せた。続けて「僕とナチはそういう関係じゃない」と言うと、ミスマは「そういう関係になれと言っておるのだ」と打ち返してくる。

「我が娘ながら、あれはなかなか良い娘だぞ。子供に優しいし、料理も美味い。胸もある。まあ

婚約の場合は主にわしの意向で婿入りとさせてもらうが、それを差し引いても良物件——」

「差し引くも何も、僕にはそんなつもり、ありません。自分のことで手一杯ですよ」

そう言って笑うと、ミスマはじつとこちらを見つめた。真剣な眼差しだった。

「イウト」

「はい」

「さては男が好みか」

「外の警護に戻ります」

「待て、冗談だ。こちら待てと言っておるのに！」

出口に向かうイウトを、ミスマは慌てた様子で引き止める。イウトはまた少し笑って、しかしそれから、蘇ってきた古い記憶に視線を伏せた。

「ミスマさん。貴方に家族へ誘われていることは嬉しいんです。それは本当です。……でも、僕は」

お前は、と、濁りきった澱の底から声がした。黄色く汚れた瞳の主が言った。

それを振り払いたくて、イウトは独り、首を振る。

「僕は」

「まあ、そう深く考えるな。気持ちの整理をつけながら、前向きに考えてくれれば、それで良い」

暖炉に背を向け、ミスマは穏やかに告げる。薄暗くて見えづらいが、微笑んでいるようにイワ

トには見えた。

「ただ、そうだな。案外、家族になるといふのはあつさりしたものだぞ。……だから、そう脅えるな」  
胸にじわりと温かいものが広がって、急に言葉が出なくなった。だからイワトは、ただ静かに頭を下げた。

うむ、うむ、とミスマは何度も頷いた。

「……さて。薄情者が仕事に戻るようだし、わしは一人で寂しい晩酌でもするかの」

「程々にして下さいよ。朝、儀式の終わりに酒臭かったら、周りに何と言われるか」

返しながら、扉を開く。途端、冷たい風がどつと入ってきて、ミスマが悲鳴を上げた。

「ではミスマさん、朝にまた。くれぐれも飲み過ぎないように」

「うむ。お主も、寒ければいつでも入ってくるがいい。……だから早く閉めてくれんか」

「はいはい、と苦笑し、深く頭を下げた。扉を閉める彼に、ミスマが片手を上げて見送りをする。

丁度、その時だった。

不意に、大きな太鼓を叩いたような音がした。

「ん？ 何の音だ？」

音は、ミスマにも届いたらしい。イワトは閉めかけていた扉をそのままに、半ば無意識に、荒涼と広がる夜の闇に目を凝らす。

遠くに、炎が立ち上がっていた。

それは、周囲に点々と灯る篝火とは、桁違いに巨大だった。その色は黄金と赤を練り混ぜたように、その形は逆立ちさせた頭蓋のように楕円だ。そして――。

「イワト――」

その正体に気付いたのと、怪訝さから駆け寄ってきたミスマが名を呼ぶのとは、ほぼ同時だった。険しい表情を見るに、彼も事態を察知したらしい。

「行くぞー！」

「あつ、ちよつとミスマさん――」

言うが否や自身を押し退けて飛び出したミスマを追って、イワトもまた駆け出した。だが、王の判断は正しい。この状況では、ミスマはイワトと共に居ることこそが最善だ。そう考え、イワトは頭を切り替えた。

「ミスマさん、先に無礼を謝ります――」

何よりも早く、あの炎の元へ。その意思は、イワトの体を強く突き動かした。闇の草原を走りながら追いついたミスマに足払いを掛け、盛大に転びかけた王の体を瞬時に担ぎ上げる。そしてまた、最大の力で大地を蹴った。ミスマには悪いが、この方が早い。

矢のように駆けること、十数秒。

辿り着いた場所——トツカが居る筈の小屋——は、彼らが察知した通り、灼熱の炎に包まれ、轟々と咆哮を上げていた。

「トツカ王！ ナチ！」

ミスマを下ろし、イワトは叫ぶ。興奮した獣のように唸り声を上げる炎は、十メートル近く離れているにもかかわらず、皮膚を焦がすような熱で冬に嘔みついていて。拡散された輝きは夜を破り、強い風に周囲の草花が揺れている。だが、小屋の外で警護している筈の、ナチの姿が何処にも見えない。

「まさか、中に」

呆然と呟くミスマ。ふと、どこか油の匂いがした。どうやら、この炎の激しさの原因のようだ。イワトは大きく息を吐いて、半ば強引に、ミスマに腰の剣を手渡した。何を、と問いかける彼へ、直ぐに戻りますから、とだけ伝え、駆け出す。熱気の塊、炎の小屋に向かって。

が、その時。小屋の中から急に、何かが飛び出してきた。

「ナチ！」

炎の中から転がってきた人影、その見慣れた容貌に、イワトは瞬時に事態を察した。駆け寄った彼はすぐさま、ナチを——そして彼女が担いでいる大柄の男とを両脇に抱え、体を反転させる。そして、思い切り大地を蹴った。

後方から、崩壊の音が追いかけてくる。

「無事か！？」

ミスマの元へ戻ったイワトは速やかに抱えていた二人を大地に下ろし、それから、剣を受け取る。突然過ぎる事態だが、すべきことはシンプルだ。王が襲撃された。まだ周囲に賊が居るかも知れない。だから彼は、剣を構え、注意深く草原を見回した。

……誰も居ない。襲撃者の姿は無く、しかし遠くから無数の足音はする。きつと、事態に気づいた周囲の兵士達がやって来たのだ。それでもまだ、彼は周囲に気を配りながら、ナチとトツカへ、改めて目を向けた。

イワト、と、弱々しくナチが言った。美しい黒い髪は炎にさらされたせいでポロポロに乱れており、その体には煤けた跡がある。火傷は見当たらない。きつと軽傷だろう。だが。

「トツカ王」

連れてきたもう一人が、既に手遅れであることは、誰の目にも明らかだった。

トツカには、首が無かったのだから。